

二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

ドールマスター 麗蘭
DOLLMASTER REIRAN
淫舞の操り人形

小説 空蟬

挿絵 あいざわひろし

序章

第一章

人形遣い

第二章

淫肉遊戯

第三章

黒糸の傀儡人形

第四章

受胎玩具

終章

248

175

117

063

010

006

登場人物紹介

Characters



わいらん 麗蘭

からくり人形・ヒトガタを操る人形遣いの少女。赤いチャイナドレスを纏いツイントールに髪を結っている。負けず嫌いで好奇心旺盛な性格。

サリサ

麗蘭が操るヒトガタ。人肉を元に製作されているため見た目は麗人の相貌だが、人形であるがゆえに無感情・無表情。

ロン

本国で罪を犯し、日本に逃亡してきた人形遣いの少年。膨大な陽力ヒトガタを扱う。

シェン

ロンが操るヒトガタ。ピエロの仮面を身に着け、ふざけた口調で命令に従う。

第三章 黒糸の傀儡人形

密閉された薄暗い空間。埃漂う倉庫内には、いくつかの生物の息吹がこだましていた。「うっ、く、臭いわ。汚い物押しつけてこないでよッ！」

再び四肢を黒糸が覆い、尻をべたりと地につけ座り込む格好で、お下げ髪の少女——麗蘭は男二人に左右から挟み込まれている。正確には、一糸纏わぬ半ヒトガタたちの、匂い立つような不潔な二本の生殖器官に、だ。

「ふん。そう言うな。我らが逸物は生体強化されておるのだぞ？」

「ひひっ、匂いも、熱も、ちっとも生身のチンポと違わねえだろ？ いんや、むしろそこいらの粗チンなんぞよりずつと濃くてアツアツだア」

すでに全裸となった二人の男が、人為的に作られた筋骨隆々の下半身を披露しながら口々に聞きたくもない自慢を繰り返す。右に見上げるほどの大男。左にはしゃがみ込んだ麗蘭とさえ頭二つ分ほどしか背丈の違わぬ小男。どちらも下卑た笑みを醜い半機械の面おもてに張りつけていた。

（うう。いやア……サリサは、あの子はこんな物、口で啜えてたつていうの……!?!）

起動停止した彼女は、麗蘭が倒れ伏している間にいずこへともなく連れ去られてしまっていた。今はここにいない魂の分身が子供のペニスを美味そうに頬張っていた光景を思い

出し、頬が火照るのを抑えきれない。ただ、無口な相棒に見つめられる心配がない、そのことだけが絶望的状况の中で唯一の救いだった。

グリグリと頬に、きつく閉じた唇へと執拗に押しつけられる二本の肉棒は、部分部分に機械的コーティングがなされ、生身とは言いがたい無機質さに満ち満ちている。それでいて、天を突き反り返る圧倒的な存在感は、明らかな牡の威厳に溢れていた。

体温よりも高い淫欲の熱源として機能し、牡の欲望を体現するなんと morphology がたい生臭い香りを放出する肉欲器官。汗と、先走りのツユ、それに恥垢が混ざった、生身の肉勃起と同様の臭気が、確実に少女の鼻孔をくすぐるのだ。

「はあ、ああ……ッ、臭いって言うてるでしょ！早く、汚らしいのどけてよッ！」

間近で青筋をヒクヒクと蠢かせる肉器官のおぞましいフォルムに怯え、鼻先をかすめる強烈な刺激臭に眉を擡めた。汚らわしい排泄器官であるのだと、どうにか言い聞かせようとする。それでも、再び大量の陽力が流入し火照り狂っている肉体には酷な、牡の淫臭を無意識のうちに肺一杯に吸い込んでしまった。

剥き出しのまま床につけた膣肉が綻び、尻の下に敷いたスカートにまでじわりと新しい蜜汁が染み込んでいくのを、否応なく自覚させられる。どれだけの恥辱にまみれても、黒糸の操り人形と成り下がった身体は逃げ出すことも、立ち上がることもすら拒絶していた。

「頑張った人形たちにはご褒美をあげないとね。悪いけど麗蘭のお口で、彼らのおちんぼ鎮めてあげてよ」

「……っ、少しも悪びれてなんかいない、癖に」

半ヒトガタたちに鬪られる少女をベッドの上から見つめ、ロンは相変わらずの無垢な笑みを見せつけてくれる。正面から見つめられると、どうしても鼓動が速まり身体が熱く火照り始めてしまう。露出した胸元で尖り始めた乳首に視線を感じ、疼きが滞留するのを抑えきれない。子供をできるだけまともに見えないよう努め、精一杯の皮肉を突き返した。

「あはは。口が悪いなあ。そう言わないで、ね？」

厳しく細められたまなじりで、黒い糸が微妙にくいくいと繰られていくのを見る。また、肉人形としての奉仕の時間がやってきたのだ。

「うく、う、ううう……ッ！ ちくしょ、くう……こんな、糸なんかでええッ！」

自分の指がまるで他人のそののように持ち上がり目前をすぎて、左右の勃起肉棒へと近寄っていく。決して慣れることのない深い絶望が、先ほど自分で剥き零した胸を、吹きさぶ埃っぽい風と共に駆け抜ける。俯きながら前を仰ぎ見た視線の先で、子供サイズの運動靴が小気味良くコンクリ床を踏み鳴らしていた。

「人形遣いの台詞じゃないね。操られるヒトガタの気分を疑似体験できる機会なんて、そうはないよ？ ボクくらい強力な力がないと、意思のある人間は操れないもの」

子供っぽい自慢。けれど、偽りでも過剰な自信でもない、至極正当な評価だ。確固たる自我のある人間を操ることの難しさは、人形遣いである麗蘭自身が誰よりもよく知っている。そして、同時に何体もの操り人形を制御することとて、ごく限られた術者のみが可能

とする、少女にとっては未知の領域なのだ。

「さ。両手で二本のちんぽを支えて。自分で口の中に迎え入れるんだ」

是が非でも、無理矢理に男たちの肉欲器官を口に詰め込ませる気なのだ。初めてのキスをつい数刻前に終えたばかりのまだ清純な唇を抉り、ロン以外の精液を知らない口内で直接たっぷりと白く熱い劣等遺伝子を注ぎ込まれてしまう――。

「い、いやよッ。こんな臭いやツ……。どんだけ洗ってないのよ、不潔男ども！ 絶ッ対に嫌！ 誰が啜えてなんてええっ……！」

だが、口とは裏腹にしつとりと汗ばんだ両手が、とうとうネットリとした熱を帯びる左右一本ずつの肉幹をそつと撫で上げた。ゆるゆると指を絡ませ、袋から裏筋を這って幹を掴む。二本が二本とも同時にビクリと跳ね、また一層鼻先をかすめる牡の香りが濃くなる。「そうそう。その威勢のよさが君のチャームポイントだからね。だから、ボクは君の自我まで奪うつもりはない。ずっと、ボクの傍で憎まれ口を叩いて欲しいな」

どこまでも小憎らしく、それでいて憎みきれない気まぐれな声音。彼の小さな手に、全ての命運を握られている。この上ない畏怖と、なぜか場にそぐわぬ憧憬の念を感じつつ見つめるその指が、またくいくいと小刻みに揺れた。

「あぐ！ い、嫌よ。あたしの身体っ、言うことを聞いて、聞きなさいよおお！」

いかに心が拒絶しても、操られるがままにしか動けない肉体は、まさに心を抜かれた人形そのものの緩慢さと、どこかぎこちない動作で左右それぞれの肉欲棒を口元へと運んで

いく。どんなに意識を掌に集中させても、感じられるのは牡の熱っぽい粘り気と、ドクドクと脈打つ蠢動のみ。

ますます濃くなつて近づく淫臭に、鼻梁が無意識にヒクヒクと蠢く。息が荒くなるに合せて上下する乳房が、ほんのりと桜色に染まり始めていた。そして――。

「へへ。そおらお待ちかねのデカマラ様の到着だ……！」

「チ！ おおつと、俺も……ひひ！ ぷるぷるのお口マ○コにご招待つとオ」

――ぐちゅうう……ッ！

ついに、二本がほぼ同時にぷるぷると弾む口唇へと硬直する先端を擦りつけてきた。勃起して膨らんだ、硬いくせに弾力にも富んだ半機械の肉傘。一本は亀頭の右半分、もう一本はくびれの下辺りから上の亀頭冠部全体を無機質な機械で覆った、異様な外観。それがドクドクと脈を打ち、生きている細胞そのもののように欲望の熱に浸されている。

「ん、んぷっ！ ひやあつ……か、勝手に押し入ったら嘔むわよ！ 臭いの近づけるなつて言ってるでしょうッ、鼻が曲がる！」

一本だけでも、幹周りが少女の手首ほどはある。口内にはとても収まりそうにないサイズが二本、迫りくる中でも気丈に憎まれ口を叩いてみせた。――実際は、そうしていないと不安で仕方がなかったからかもしれない。

ヒクヒクと蠢動する先端の縦に走る割れ目から染み出た半透明の汁が、リップ代わりと言わんばかりに唇へと塗りつけられていく。ご丁寧に一本が上唇、もう一方が下唇と器用

に分担し、とろみのある見るからに濃厚な汚濁を、思い思いの動きで塗りたくっていった。

「んんぐう……や、やめなふあ……！」

口端から染み入る苦みの強い味わいと、舌先や歯に絡むねっとりとした粘着質な食感がこの上なく不快だ。頬を肉棒でつつつかれ凹まされながら、それでも気丈に睨みつけた眼差しには深い憎悪が浮かんだ。

「さあ、そろそろ舌を出して、彼らの臭いちんぽをじかに慰めてあげてよ」

（い、や……よ！ 汚れた、おしっこする棒を口に含むなんて……絶対間違ってる！）

心は、薄桃色の肉檻の奥で頑強な抵抗を示している。だが、持ち主の意思とは関係なく、むしろ反抗するかのようには口中では唾液がひしめき、ヌラヌラと濡れ光る舌が差し出されていく。赤い舌が輝く様を、少女は戦きと絶望の中で見据えていた。

「ひひ、早くしねえか、あア？」

——ぺちっ、ぺちんッ！

「いひゃっ……！ つ、つめふあ、ああつ……！」

小男の握るナイフの背の部分が、剥き出しの乳肌をひたひたと打ち叩く。弾む乳肉の頂点でツンと尖った乳首が刃の冷たさに震えた。ひとたび刃を立てられれば、乳房ごとものがれかねない。女としての強い恐怖感が人形遣いとしての責務を束の間上回る。地を落ち着けた尻が自然と冷え、女座りでへたり込んだ足はじんわりと冷たい恐怖に震え始めた。

「へへ、少しでも動くとスパッと可愛い乳首を剃り落としちまうかもなア」

だが、ジンジンと相反する疼きが胸の奥で芽生え始めているのもまた事実だ。冷たい刃が軽妙なりズムで乳丘を打つたび、じわりじわりと鼓動の速まる胸の奥底で何かもどかしい感情が揺り起こされていくのを感じる。

(な、なんなのよっ……こんな、悔しい想いさせられてるのに。どうして、どうしておっぱいが疼いて、あ、あぁっ……耐えられないっ！)

また荒い息が零れ始め、自然と口腔の赤が覗いた。機を逃すまいと唾液をたっぷり乗せた赤舌がぬるりと這い出て牡肉へとすがりついていく。赤い衣装から零れ出た白い乳肌、そこに銀色に鈍く輝く刃が押し当てられてかもし出す三色の光景が、なぜか今は酷く陰惨で美しく、猥雑なものに思えた。

「おおら、丁寧に舐めてくれよオ」

「ひやらっ、んあ、あぐらッ！」

ずい、と突き出された勃起肉棒へと、舌が這う。筋張った幹に、生温かい肉の温度よりなお熱い火照った舌先がぺたりと接着し、牡肉が腰を震わせ歓喜に飛び跳ねた。

(あ、つい……それに少し機械の、油っぽい匂いが……し、舌に絡んで……。うう、あ、あぁあぁ……！)

やはり生身とは違う、どこか硬質な触れ心地を認識させられる。油っぽい味わいはすぐに唾液に混じり識別できなくなってしまった。男の一部、生殖器官、機械混じりの肉体。どの側面を切り取っても未知なる存在を口内に迎え入れねばならない。理不尽な決定事項

に萎縮した心を反映し、身体も強張る。どうか糸の呪縛を逃れようと足掻いた肉体は、強制的に操られるその都度、みしみしと破滅の序曲をそこかしこで奏でた。

一刻も早く舌を離したい。それなのに実際には、舌は中枢神経を操る糸の繰るままに左右の肉棒へと唾液をなすりつける。ネットと肉の先が唾液の糸を紡ぎながら、味覚的な苦みと敗北の苦い味わいとを同時に少女の心と身体に刻みつけていった。

「んあ、むっ……はぶ。ちゅっ、ちゅちゅう、ぢゅぼれろれおおっ！ んっ、んぐ！」
「ひひ、いいぞ。俺のももつと舐めしやぶってくれよオ」

口内にどんどんと溜まる唾液と先走り、牡肉表面の汗と恥垢、全ての混じった汚濁を、息苦しさに負けて飲み下す。喉を汚濁が滑り落ち嚥下される瞬間、ブルンと乳丘が震えた。「おおら、先つぼの割れ目を舌先でほじるんだ。グリグリってな」

——くい、くい。

従者たちの要望に応えてやろうと、少年の細指が黒糸を手繰る。哀れな肉人形と化した麗蘭は、どんなに屈辱的で卑猥に満ちた命であろうがそれに従う他にない。

「くひあ、い……あぶつ、ちゅずぼ！ んはっ……ぶぢゅ！ ぢゅずぶぶうう……！」
大男の体軀に見合う雄々しさの幹周りに対しあまりに小さな指先で、どうにか掴まえた肉棒の先端。気を抜けばすぐにでも天に向け反り返ろうとする、ほぼ全てが機械で覆われた亀頭の中心でわずかに残った生身の部分。

その奇異な外見にも躊躇わず、割れ目に舌が突き入れられていく。そのまま激しく吸引

を開始すれば、たちまちのうちに牡肉は筋をぶくりと膨らませて一層の隆起と脈動を繰り返し始めた。

(く……口に、汚い汁が押し入ってきて……は、ああ……な、なのにイッ！)

尿道をほじくり回す舌を伝い、どんと口内へと垂れ流されるところのある先走り汁。舌先にぴりぴりと響く、子種の薄まった半透明の汁が喉を滑るたび、身体がカッカと火照り狂うのが止められない。

モジモジと地を這いくねる尻の中心で、パクパクと肉唇が蠢きながらまたネットリと濃い蜜を漏らしている。スカートの後ろ垂れがもう完全に濡れそぼって尻に張りついている、その心地悪いはずの感覚までが淫らな身体を刺激して、快楽に咽び泣かせていた。

「あぶあ、あ、はひ……ッ！ これ、全部糸のせい、アイツの、ロンの陽力があたしを狂わせてるのおっ……」

「御託はいいからよ、俺のもさっさとペロで綺麗にしろや」

ずいと口元に差し出される小男の、細身に似合わぬ極太の、右半身を機械で埋め尽くした肉槍。心なしか大男のものより長さでは勝っている気さえする半機械の剛直が、すでに大男のものを口先で食んでいる口内へと強引に突き入ろうとしている。

「さ、次は差し出されたちんぽを二本、交互に舐めて」

「あぶ！ む、無理……二本なんて、むひっ、ひっ、やぶふうんんんん——！！」

後頭部を押さえ込まれ、柔らかな唇をめくって肉棒を押しつけられていく。ツイインター

ルを一本ずつ掴まれ左右競うように引かれながら、肉棒へのキスを強制された。口中に溢れる苦みばしった汁が、唇をこじ開けようとするとする亀頭とすでに口中を占拠した亀頭の間で掻き混ぜられ、ぐちゅぐちゅと淫猥な音を奏でて泡立つ。

機械と生身半分ずつの感触も味わいも異なる二本の肉欲器官で交互に唇を突かれ、油の匂いとたぎった牡の生臭さ、汗臭さが充滿する。人工的な淫熱と、生身の肉が吐き出す欲望の徴。対照的な肉棒で一度に攻められる唇は、もはや融解寸前。二本交互に脈動するため舌先には牡の振動が響きつばなしで、痺れが舌から喉奥へと伝導していく。思わず呑んだ息が、口内の唾液と先走りの混合汁をも喉に落とし込んでしまった。

「んぶ……んん、あふあ、また……飲んじやった、あぁあ……！」

股座を火照らせる疼きがまた一層強くなる。冷たいはずのコンクリートにじわりと温かな蜜の泉が形成され、スカートの下から溢れ流れていく。スカート生地をずぶ濡れにさせ、蜜池に浸る尻がくねる。剥き出しの乳肌は倉庫内の寒さにも負けず薄紅に火照り、充血した乳首が牡の愛撫を求めて天を突く。愛欲にまみれ、盛りのついた肉が煮えたぎる。パートナーの淫行を見せつけられ焦らされた身体と、耐え続けた心に限界が近づいていた。

「はふっ、ふうう……あぶじゅっ……んふー、ふ、ふう……うんん……！」

鼻先を漂う牡臭さと、唇を湿らせる淫らな味に、もうこれ以上は抗いきれそうもない。息することもままならず鼻から荒い溜め息を吐く。口端からは泡立ち濁った汚汁がぼたぼたと零れ落ちて、剥き出しの胸元を汚穢に染め、薄桃色に上気した乳肌を覆い隠す。乳頭



行き交う人々の間に突如朗々と響き渡る低い音声。怪人人形の仮面がカタカタ揺れ動き、唇などないはずの木製顔面の奥から不気味な声が轟き渡る。

「な、なんだあありゃあ」

「知らねえ。新手のチンドン屋かあ？」

不審な集団を遠巻きに見つめる聴衆たちを尻目に、怪人人形の口上はなおも続く。

カツ——！ 大鎌の柄で強く床を打ち叩き、マントをなびかせことさら大仰に細い木製の両腕を広げる。事ここに至ってシエンが人形であることに気づいた者も多く、麗蘭たちを取り囲む観客の輪のあちこちでざわつきと不穏な歓声、囁し声が飛び交いだした。

「ここにおわすチャイナ服美少女。その名も人形遣いの麗蘭ちゃんがあ。今宵は自ら人形に。……真つ黒な糸に操られ、エロス満開華満開。股間の花びらもご開帳だァー！」

(……よくも、まあ。べらつべらとオ……！)

奇怪な姿のからくり人形の言葉に、苛立ちが募る。すでに少年から通達を受けていた通りの内容。覚悟はまだできていない。羞恥を煽る台詞の数々に背を向けて逃げ出したい気持ちが溢れる。赤らむ頬が周りの観衆からじろじろと観察されてはいまいか、そんなことばかりが気にかかり、胸奥がチリチリと焼け焦げていった。

「麗蘭。分かっているね。教えた通りに言うんだ。でないと」

でないと、空港中の一般市民を抹殺する——。子供の言葉を胸の内で反芻して、強く嘯み締めた唇が色をなくす。

(ダメだ。そのような事態を引き起こすわけにはいかない……!)

羞恥心と自尊心の連合に、人を助けるためという人形遣い本来の使命と、少女の自己犠牲精神がわずかに勝った。歯を噛み締め、決意を秘めて前に向き直る。

「お、おい今の話、マジなのか」

「どど、ドッキリとかじゃね？」

命の危険が及ぶことなど露知らぬ連中、特に若い男たちはこぞって視線をチャイナドレスの上に滑らせた。じかにドレスで包まれたおかげでぶつくりと生地を押し上げる乳頭、丸みを帯びた尻のラインがくつきりと浮き出る臀部。果ては汗がにじむうなじから、スリットからチラチラと覗く健康的な生脚に至るまで。貪欲な男の視線が全身を、まるでドレス一枚隔てた肌を直接舐め回すように執拗に見つめてくる。

無邪気で、酷薄な子供らしさの塊のような少年ならば、前言通り空港内に滞在する全ての人間を瞬く間に殺してしまうだろう。黒糸を手繰り寄せ、怪人人形を操るだけで数百の首がものの半時もあれば全て跳ね飛ぶ。

従う他にないのだ。操り人形とされた今の身では。

「身体は操られて、穢されても……心だけは譲らないから」

振り返ることなく、そう吐き捨てて。少女は用意されたステージへと進む。淫蕩で浅ましい牝の貌を魅せるための、ステージ。観客は数十人。すでに制止する職員もおらず無法地帯と化した空港内で一際異彩を放つ人の輪の中央で、少女はゆるゆると己の胸元へと手

を下ろす。あらかじめ教えられた通りの台詞が、躊躇いがちに震える唇を突いて出た。

「あつ、あたし、麗蘭は……エッチで、ろ、露出……狂の、オンナ……なのっ」

——がヤッ……うおおおおおおお！

つつかえつつかえだつたものの、あからさまに媚を売った蕩けた声音に同性の見物客たちから無数の侮蔑の視線が肌に突き刺さるのを感じる。彼女たちを助けるためにやったこととで逆に糾弾される——誰にも理解されぬジレンマが胸を焦がす。

「ひゅー、いいぞー！」

男たちの明け透けな下卑た目つきも、また別の意味で胸の内を焦がした。

（か、感じちゃつてる。見られた、だけで……アイツの力で狂つたままの身体が、男の人を求めちゃつてるう……）

ロンの陽力が、またたつぷりと黒糸に乗ってドレスをすり抜け染み込んでくる。じつとりと汗ばむ肌にかくに着込んだ衣装が張りつく、湿った感触が酷く心地悪かった。

一日足らずで否応なく慣らされてしまった、忌まわしくも切ない、疼きを誘発する異能力。早まる動悸に促され、赤いパンプスのそのそと床に傳いた。膝立ちの体勢で、再度淫猥な台詞が口を突く。

「あたし……み、見られて感じる恥女、なのおっ……。ブラつけてないから、ち、乳首が、はあつ……ビンビンに勃起しちゃった、エッチなポッチ見てええ！」

身体は黒糸が手繰り寄せるままに動かされている。だが、唯一自由を約束された唇から

漏れる言葉だけは、正真正銘麗蘭自身の意思によるものだ。人質を盾に強制されているとはいえ、進んではしたくない言葉の羅列を紡いでいる。己の意思ではない、そう否定すればするほど、衣装の内側でくすぶる淫欲への渴望は強まっていった。

(言っちゃった。あたし、なんてこと……あつ、はああ……)

浅ましい己の姿に恥じ入るほどに、衣装と擦れる乳首はズキズキと疼き快楽刺激を乳肌一杯に溜め込んでゆく。すうすうと冷風がすり抜ける股間では、早くも溢れた蜜汁が擦れ合う腿の間を伝って、リノリウムの床に水滴をいくつも零れていった。

「ま、マジかよお……あんなに可愛いのに。ち、恥女つてえヤツかあ」

男たちの視線がさらに強く、遠慮なく突き刺さる。見られる部位も、ぷっくり浮きでた乳首や薄布一枚隔てて覗く秘処ばかりに集中してきた。彼らをより昂奮させる、そのためだけにできるだけ淫らな表情を作る。真っ先にまぶたの裏に描いたのは、尻穴を子供に犯され悦ぶパートナー、サリサの表情だ。

(サリサのエッチな貌……んく、思い出しただけで、濡れてきちゃってる……うう！)

高揚で火照り狂う乳肌が、早く外に出して欲しいと疼いている。演技ではなく心底から湧き上がる快感を伝えるべくチラチラと糸の主に目を向けて。ただ命じられるがままにドレスごと慎ましい膨らみを両手で揉みしだく。侮蔑と、獣欲の視線が痛くて、それなのに心地いい。パンプスの踵が床を擦る。太腿をトロリと、陰毛から滴る蜜が垂れ落ちた。

望まぬうちに被虐に慣らされた肉体が、肉欲に蕩けてはしたなく喘いでいる――。

「さアさア。お次はいよいよチャイナドレスに隠された、ツユだくマ○コのご開帳オ！」
笑顔の張りついた仮面がカチャカチャと揺れる。怪人人形が板についた司会ぶりで、暗に少年の意向を伝えてきた。すぐさま黒糸のしなりに応えて肉体が動く。無数の脚が踏みしめた床へと躊躇なく仰向けに寝転び、少女の羞恥心などお構いなしに両脚が大股に開く。
「い、いやあ……み、見ないで」

「なあに言つてんだか。てめえから股開いて見せてる癖によ！」

力を込めようとした拳は、だらしなく垂れたまま。思わず零した弱音に被さるように、男の怒号が即座に返ってきた。はっと顔を上げて見渡せば、全方位から注がれる、暴動に発展しかねないほどにギラついた無数の牡の眼光。もう、後戻りはできないのだ。

目まぐるしく吐き出される吐息の荒さに合わせ、光沢を放つ衣装の下腹部が緩やかに上下し、汗滴る太腿がピクピクと震えた。少年人形遣いの指がクンとしなり、命令通りの焦らすような艶かしい手つきでチャイナドレスの腹を、へその上を通り抜けて少女人形の右手がスカートへと降りていく。

（言わないと……教えられた通り言わないと、ここにいるみんなが殺されちゃう、だから、違うの、あたしが望んでるわけじゃ、ないのよおお……ッ！）

幾多の同性による蔑みと、わずかに混入した羨望の眼差しに胸を震わせて。あくまで人命を尊んだ結果なのだと、またいつもの免罪符を手に少女は卑猥な文言を吐き零す。

「み、見てえっ……あたしのっ、ぐ、ぐしよ濡れになったスケベ穴ああッッ！」

台詞と同時に、股間を包んでいた湿った布の重みが消失した。

「すっすげえ……生マ○コ！」

「ビラビラがはみ出してねえ。まだ全然使ってない、子供みてえなマ○コだ……！」

おオオオ……！ 空港内の空気が一変し、これまで半信半疑だった連中までが視線を集中させたことで熱気が一段と跳ね上がる。胸元、さらに見る者の角度によっては卑猥な台詞を吐く唇も。他の性的な箇所が秘されていることで、唯一晒される桃色粘膜のイヤらしさがより顕著に、ありありと牡どもの網膜を灼いた。しどに濡れて張りついた黒々とした茂みのその奥で、熱視線を浴びて悦び震える淫らな肉の花が咲いている。

（み、られて……る。穴が空くほどじっくり観察されちゃってる……ううう！）

「えー。穴は最初から開いてると思うよ」

少年に心を読み取られたことなど、もう些事にすぎなかった。ジリジリと股下の皮膚を灼く明け透けな視線が、膨大な淫熱を伴って股間を直撃する。操り糸に従って腰がぐいぐいと揺すられるたび、陰毛にまで染み渡った蜜がぴっぴつと辺り一面に飛び散った。

「エロい腰使いだぜえ……や、やっぱ後ろのガキに仕込まれたのかなあ」

「うっそ。あんな可愛い子供に、エッチされてるのお？ 絶対違うっしょ。逆よ逆う。どう見たってあの女が男の子を每晚襲ってるのよ。なんだって恥女なんだもの！」

視姦され続ける股座はようやくの解放に打ち震え、こもった熱気を吐き出し、さらに昂奮で上気しては肌を桜色に染める。口々に囁かれる無責任な憶測に、不本意ながらも発情

した肉体が聞き入ってしまう。

「ふふ。見せてあげなよ麗蘭。奥の奥まで、君のエッチな穴の全部をね……！」

——くんッ！

軽やかに糸を手繰る指の軌跡に彼の意図を読み取り、少女の心は驚愕に強張った。

「う、ううっ、そ、そんな、ダメ……。ダメよおっ、そ、そこまではできない……！」

「やるんだ。ちゃんと自分の言葉でみんなに告げてね？　ボクの可愛いお人形サン」

——ぐっ、くくうん！

股間に這った左の指先が、ゆっくりと蠢くのに従って、辺りでごくりと息を呑む音がいくつも聞こえる。どんなに指先に力を込めてみても、脚を閉じようと力んでも、もう少女にはどうすることもできなかった。

（みんなを助けるため、人命救助。それが、あたしたち陽龍に属する者の務め……そのためだもの、そう、これは使命のためなのよッ！）

早く。操られる指先の行動が終わってしまう前に言葉を追隨させなければ、結局は任務を遂行できずに観衆を見殺しにしてしまう。逸る心を抑えつけ、羞恥心をひた隠して、戸惑う唇を強引に震わせる。少年人形遣いが望む通りに、今から自分がさせられようとしている淫蕩行為を赤裸々に叫んだ。

「お、お汁漏らしちゃってる、だらしないヌレヌレのオマ○コおッ！　あは、はあ、お、奥までじいっくり覗いて欲しいのおお……！」



「く、ふう……じつくり仕込んであげるね……ほおら」

「あぐ……んんくうう！ な、にこれえッ違う！ さっきまでとオオあヒインッ！」

前後の抽送ではなく、深く突き刺さったまま小刻みに抉り回すような腰使いに、瞬間に淫欲に痺れた脳内が明滅した。尻側の肉粘膜がさがろうにも勃起肉棒は執拗に膣上部の肉壁ばかりを擦り、摩擦熱と淫欲で蜜汁を沸騰させていく。

一極集中の快楽は、一足飛びに麗蘭の火照り狂った欲張りな媚肉を蕩かせ、また快感にありつけないでいる部位を貪欲に疼かせる。

「あふ……おっぱいも……！ たっぷり揉んで大きくしたげるッ」

むにゅうッ！ ぐにつぐにゆぐにゆにゅうう！ 汗ばんだ腋をすり抜けたロンの両腕が痛痒に咽んでいた乳肉を力強く鷲掴んだ。いきなりの激しい揉み込みに、痒みは瞬時に快楽へとすり代わる。ジンジンと痺れていた乳首を指先で扶まれ、コリコリと硬い芯を刺激されて、鼓動は目まぐるしく高鳴っていった。蛇汁をたっぷりすり込まれた乳肌は、与えられる快楽刺激を数倍にも増幅させ、性欲に溺れた神経を昂ぶらせる。

「マスター……っは、はう！ すごい、エッチな貌、おとおッ！」

「暴れるなって。全く主従揃って世話の焼ける娘さんたちだ」

喪服の内に潜った蛇に直接蛇汁を塗り込まれ、淫墮の疼きに銀髪的美貌が咽び泣く。怪人人形の指先が黒衣の上から、ぼっちり浮き出た乳首を押し潰せば、造り物の肉肌の内に人となら変わらぬ淫悦の波が押し寄せた。たっぷりの重量感ある乳丘を二個同時に揉み

潰され、イヤらしく形を変えられるたびに、小ぶりの唇から甘く媚びた声音が漏れ出る。従者は子供に貫かれた主に、主は怪人の腕の中で啼く従者に焦点を結び、互いの昂ぶりを餌に競うようにして、二人の牝は肉欲に溺れていく。

「おっ、おっぱい嫌アアッ！ 感じすぎちゃっ、あくふッ、のおお！」

子供の細腕に添えた己の腕は引き剥がされるでもなく、ただ震えるままに麗蘭は牡の体温だけを与えられる。じつとりと汗ばんだ子供特有の高めの体温。熱い。感じている熱さはロンから伝染したものだだろうか。それとも、少女自身、赤い装束の内側から火照り狂っているせいかな。あるいは、その両方だろう。

「嫌だっと言うのは、気持ちいいとき。本当に意地っ張りで可愛いね……麗蘭ッ！」

——ぎゅっ、ぎゅちちッ！

摘まれた乳首が二個同時に押し潰され、弾け散る甘美電流に乳奥が灼け焦げる。

「あぎひいイッ！ あぐ、ぐふうううううう！ 嫌、いやよおっ……」

子供の薄い胸板の上でべたつく赤の衣装と肢体を弾ませ、『嫌』という単語を繰り返す口にした。そうすれば、また乳首を虐めてもらえる。甘美な刺激に蕩かされ、膣肉はしきりに肉勃起を締め上げる。全ての快樂が連鎖的に繋がり、全身どこを弄られてもそれは結局男の肉欲棒を悦ばせる結果にたどり着くのだ。

「これはもう、いらぬよね……？」

めくれた胸元の生地にあしらわれた龍の刺繍。組織の一員である徴。それを子供の爪先

がカリカリと引つ搔いても、もう湧き出る怒りは少しもない。それどころか、思わず頷いてしまいそうになる己の心が実に浅ましく、何よりも恐ろしい。

（だ、め……それだけは……。あふうう、でも、頷けばもつと気持ちいいことされて……ううん。してくれるの……おおつ）

ちらりと、逆さの視界に映る相棒の淫態を一瞥し、意を決したように唇を噛む。

「ぐちゅぐちゅマ○コの方はもう、ボクの味と形を覚えてくれたかなあ……くんんッ！」
体重で勝る少女の重みなどまるで苦にもせず、乳房を揉み潰したまま腰のバネだけで鋭く肉壺の壁を突き上げる。放すまいときつく揉まれる乳丘の上で、彼の汗と蛇汁とがぬかるみジュルルと滑った。塗り広がる濃縮陽力に、挟まれた指の谷間で乳首が痛いほど尖る。

「削れるうううッ！ お腹の中あッ、お乳もつ……あひッひいああああ〜〜〜！」

膣内で暴れ回る肉勃起が出来たてのカウパー汁を好き放題に撒き、その後を熱く爛れた淫靡な肉褻がぎゅうぎゅうと搾り、貪欲に吸り上げていく。男の肉欲の形を生殖器官に刻みつけられてしまう、そのことが何よりも強く淫蕩娘の心を揺り動かした。

まるで別の生き物のように腰が激しく少年の上で跳ねる。腰を覆った蛇の回転に合わせ、思う様肉欲を貪り、淫らに繋がった腰をくねらせた。結合部で泡立って溢れた蜜が、ロンの極太肉幹で押し戻され、咀嚼されてはまた溢れ出る。激しく揺れるツインテールの先まだが、快楽に打ち震え、暗闇の中で舞い踊っていた。

赤い衣装が淫蕩の腰振りダンスに興じる中。子供の柔らかな唇は、目の前のうなじをく

すぐりながらやはり昂奮に満ちた熱い吐息と共に放蕩なる台詞を吐き零す。

「ホント、麗蘭の髪の毛、綺麗だね……。あはっ、またその髪、真っ白に汚してみたくなっちゃった……。君が忌み嫌う、アイツらのザーメンでっ！」

くいッ！ 乳房に乗ったロンの左手にいつの間にか絡んでいた黒糸がしなるのを、少女は甘い疼きが残る媚肌で確認した。その手が名残惜しげに追いつがる乳肉を離れ、指し示した先には――。

「お呼びですかアロン様」

「ひひ、やっとなんにもお裾分けでえ？」

忌まわしき半ヒトガタ。巨軀を揺する戦闘狂と小さな狂剣が不気味に笑みを交わし合う。どちらもすでにズボンのジッパ―から隆々と猛った機械化ペニスを剥き出し、あろうことか己の手で扱き上げながらずかずかと歩み寄ってきた。半機械の切っ先が差し向けられているのは、麗蘭自慢の艶やかに輝く黒いお下げ髪。

(汚い汁で髪の毛、また穢されちゃううう……。なのに、なんでこんなに、ドッ、ドキドキ、してるのおおおッ！)

誇りもなく力に溺れ、人であることすら捨てた見下げ果てた連中の肉欲器官が脈打つたび、言いようのない高揚が身を内側から焦がし、はっはっはっ荒い息遣いが薄闇に轟く。チリチリと淫熱に炙られた勃起乳首は硬くしこった先端を少年の指に挟まれ、鋭く突き抜ける快感と共にドクドクと高鳴った。見下し続けた半ヒトガタどもの穢れた汚濁汁で、自慢

の髪の毛をまんべんなく汚し尽くされることに鬱屈した被虐悦楽を刺激され、股下の媚肉がきつく啜え込んだ肉棒を締め上げる。

「そうだ。サリサに扱ってもらおうか。——シエン」

「あいあいさー。キシシ」

マゾヒスティックで鬱屈とした快楽感情が発散する。闇に舞う黒髪に添えさせられた相棒の手が、怪人人形に導かれるがまま柔らかく髪束を掴んだ。髪に感じる相棒の体温に少しだけ落ち着くと共に、近寄る牡の臭気に鼻孔がヒクつき、鼻の頭に汗が浮く。

「ほら、しっかりと扱くんだよサリサッ、っは、ああふうっ……！」

——ずぶぢゅっ！ ぐぢゅっぐぶぶぶ！

「んぐはあッ……はっ、ひイ！ お腹ッ、あひいやああッ！」

ビクン！ ビクビクウッ！ 執拗に擦られる腔壁越しに牡の胎動を受け取り、ロンの昂奮をダイレクトに享受させられる。さらに右手で下腹部を押さえ込まれたことで、より胎動は深く子宮の底にまで押し響いた。

黒髪が白濁汁で汚される様を想像し、昂ぶっているのは少女自身ばかりではない。彼女を誰よりも欲する男も、同様に屈折した快感に身を任せようとしているのだ。

「そおら巻いてくれや」

左右に引かれた毛先がネチヨリと湿った音を立てて、先走りのにじむ雁首へと巻かれていく。黒髪の本一本でじかに感じる熱っぽく、しかしどこか無機質な温度に、「人なら

ざる者」に犯されるのだと明確に胸奥に刻みつけられた。

「はい……髪のを、ふぁ、マスターの髪で、ちんぽをくるみ、ますっ……っはぁあ」

にちゅうっ……。耳に残る粘着質な水音を響かせ、左右ほぼ同時に髪束で半機械肉棒がくるまれた。美しく長いお下げ髪が幾重にも肉幹に巻きつけられ、内で脈打つ牡の灼熱に怯えたように震える。早くも染み出した先走り、髪束にじわじわとにじんできく。過敏にされた黒髪の一本一本から克明に伝わる粘つきに、股間が湿り、乳首が尖った。

「はふ、ふうう……汚されてる、のにつ、か、感じちゃってるのおお！」

自身の心境を確認するように、声を張り上げ甘く啼く。期待で呼吸が、詰まる。霞む視界の端で、ベッド脇に佇む半ヒトガタたちが薄笑いを浮かべたような気がした。

「ふん、加減を間違えると束ごと引き千切ってしまいそうだなァ！」

ぎっ、ぎちつぎちぎちィッ！ ぶっんッ！ 輪状になつた髪留めが弾け飛ぶと同時に、一気に長いお下げの半ば以上を巻き取られ、添えたサリサの手により左右一斉の激しい摩擦が髪束を襲う。ずいと押し出され、視界を半ば以上埋め尽くした右半分機械の肉勃起と完全機械化された亀頭。黒髪から飛び出た二本が同時に、鼻頭をベチベチと叩いた。

「あひいいい！ 感じるッ、ねっとり熱いのが髪の中にあるよおおおッ！」

髪を引かれる痛みも、鼻を打たれた屈辱も、もうどうでもいい。頭の上で響く艶かしい声に耳蕩かされ、望むのはただ、剥き出した乳肉を無性に疼かせる肉欲への衝動だけだ。

自慢の黒髪に包まれる半機械の脈動に、飢えた牝の渴望が刺激されている。胎奥で粘膜

をすりつぶす肉勃起と一緒にたつて責め立てる淫熱の欲棒に、添えられたサリサの手が自然と髪束を握り締めた。激しく擦り上げるサリサの声がしきりに頭上で響く。

「私も、掌でドクドク脈打ってるの、感じ、ますううっ……」

ニチュ、ニチャと髪束から粘着音が伝わる。己の手にまで染み出した粘つきを厭うでもなく、むしろ望んで主の黒髪にすり込むように。規則的で素早い上下運動で髪束ごと半機械勃起を抜き上げ、時折毛先を摘んでは亀頭の割れ目をくすぐる。汁濡れに輝く黒髪をうっとり見つめ、美麗のヒトガタは甘い吐息を主の額に吐きかけた。

「マスター……麗蘭の髪が、男たちの汁で汚されて……ああ、はおう……」

背後の怪人に胸を掴まれ、黒蛇のぬかるむ悦楽に身を浸すパートナー。彼女の黒い装束が蛇汁で濡れて張りつき、くつきりとボディラインの陰影を、内で蠢く蛇どものとぐろを巻いたフォルムを浮かばせている。

「サリッ、あひッ！ やあ、ネチャネチャしてっ、ひっ、ああひい、サリサああッ！」

麗蘭自身の黒髪がネチャネチャと粘液にまみれながら、半機械肉棒を抜く、淫靡で、惨めで、浅ましい光景に、自然と腰が跳ねた。締めつけた腔内の肉勃起がドクドクと鼓動を轟かせては喜悦の先走りを粘膜に擦りつけていく。子供の手で押された腹の上では黒蛇たちが競うように体液を噴きかけ暴れ回る。牡の匂いに全身が染まりゆく実感に、舌が突き出て子宮が震えた。

——ぢゅっぢゅじゅにゅぢゅッ！ じゅこっ、にぢゅじゅうッ！



「おっ、おオ！ いいぜえ。お前がロン様にしこたまぶち抜かれてるところ見て溜まってんだ。じきに髪にぶっかけてやる、ぜええ！」

火照る頬に左右一個ずつが乗せられたシワくちやの精囊がきゅつと引き締まった。

「射精間近……くあ！ ああ、マスターの髪が、もうこんな……！」

呼応するようにサリサの手が上下する速度を上げる。主の髪が汚れていく様に昂奮して、くねる腰を背後の怪人に預け、蛇どもに這いずられる胸を悩ましげに揺らし、麗蘭に見せつけてくる。

機械的な愛撫に晒されドクドクと脈を打つ二本の肉棒の体温は火傷しそうなまでに熱を帯びていた。宣告通りすぐに発射される。黒髪を白く穢されるのもうじきだ——。

（べたつく……男の匂い……味、硬くて熱いおちんちんの味ィ……ィィッ！）

髪束から滴る透明のツユに吸いつこうと、はしたなく突き出た舌がよだれを零す。垂れた唾液は赤い衣装の腹を滑り、股下で痙攣する太腿を濡らした。灼熱棒に穿たれる肉唇から染み出した蜜と混ざり合って唾液は淫蕩の味わいの蜜となる。

「あむっ……ちゅちゅ……。甘酸っぱ……エッチな麗蘭の味、好きだよッ！」

激しく腰を突き立てつつ子供の右手指先にすくい取られた混合蜜は、腹の上で身体を揺する少女にこれ見よがしに見せつけられた後、躊躇いなく彼自身の唇へと吸い込まれた。

ズゴと遠慮なく突き立てられる肉欲の塊に腰が押し上げられ、心と肉体双方が喜悦に咽び狂う。唾液の一滴さえ所有物として少年に食まれる、そのことに胸奥はより淫靡な

熱に火照り、尖った乳首が擦れまた悶える。

「はひっ、ひいー……ら、めっ……おかひくなるううう！」

息も絶え絶えに、とうとうろれつも怪しくなった。鼻のすぐ真上で扱かれる亀頭から匂い立つカウパーの粘つく匂いも、髪束にすり込まれる透明汁の泡立った感触にも。倒錯した少女の肉体全体が過剰反応を起こして悶絶する。

「麗、蘭っ、マスターの、髪、ぐちゅぐちゅとイヤらしい音を立てて、ますっ、あはあ、イヤらしい牡の匂いが染みついて……えッ！」

黒衣の内でも暴れる黒蛇の猛攻に、美貌を歪めてパートナーが啼いていた。シエンに胸を掴まれたまま、自由になる腰元をクイクイと男に押しつけて、荒い息を吐きかけて。より一層黒髪で巻いた肉勃起を慰める手つきを速めていく。

「あぐっ！ ああ、ひい！ やらっ、もお、もおやアア！」

髪を乱暴に引かれてさえ、快楽欲求に喘ぎ啼いた。ドクドクと荒れ狂う肉勃起を膣壁で感じ取り、どぷりと股下で蜜を零す。お気に入りの衣装が汚れることも厭わずに、だらりと開いた口端からよだれを垂らした。

「くうっ、ん……！ すぐにまた一番奥で出してあげるッ！」

自分でつぶやいた言葉に昂奮したのか一層硬直した尖端で小突き上げてきた肉槍に対し、たつぶりの蜜で浸し、自在に蠢く肉襞で締めつけ撫で擦り、目一杯の歓待を続けながら。

「ひう、うう、んんぐう！ まらっ、またアア！ 奥っ、だひやれちやうろおおお！」

黒衣の内では黒蛇どもに群がられ、怪人人形の指が深く食い込んだことで乳肌になんた陽力汁をぶち撒けられ。溢れる愉悅に耐えかねて甘い喘ぎをひっきりなしに漏らし、冷静さを常とした美貌が淫欲の牝のそれに成り代わる。

ぶるッ……待ち焦がれる娘の目前で、絡む美女人形の指を弾いて一段と大きな脈動が龟头を震わせた。男の硬い骨盤が髪束を絡ませたまま間近の少女の耳朶を擦り、鼻先にぶつかって――。

「そおおおらアアア！ 喰らえッ小娘エエエエ!!」

——こぼびゅッ！ ぶぢゅぢゅびゅびゅううううッ！

黒髪束の束から噴き出た白濁の噴水が、ばちやばちやと鼻梁を叩く。熱い飛沫に叩かれる鼻頭がこつてりと染み込む熱にヒクヒクと跳ね、鼻孔を犯す濃厚な精臭が少女の淫蕩を煽る。

「はっひいひい！ 臭いひいッ！ あついつ、ろおお——ッ！」

視界を白濁で染め抜かれる。鼻先から吸い込んだ臭気はすぐさま股間へと伝導し、埋め込まれた肉欲の塊をぎゅうぎゅうと締めつけ、さらなる愉悅をねだった。もうじきそこから吐き出されるであろうネバネバの子種汁を待ちわび、肉壺全体が震えている。

牡の欲望汁を自慢の髪で浴び、征服される悦び。そして子を孕む器官を、今まさにたっぷり陽力を含んだ男のエキスで染め抜かれようとしている。堪らなかった。力づくで墮とされ屈服させられることに、心が、身体が応じて啼いている。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>